

『石にひしがれた雑草』小考

—『クロイツェル・ソナタ』（トルストイ）を手掛りに—

吉 田 俊 彦

はじめに

『石にひしがれた雑草』は、大正七年四月、雑誌「太陽」に発表された作品である。^{注1}「有島は、概して表題のつけ方の拙い作家であつた」と評したのは本多秋五氏であるが、この表題の「石」と「雑草」に重い意味がこめられていることは確かである。小坂晋氏は本多氏の見解を批判的に捉え、^{注2}「石にひしがれた雑草」の「石」とは、社会、環境というよりは寧ろ、有島の言う「運命」「性格」、換言すれば、「人間以上に悪戯好きで巧妙な自然」「本能」であり、「雑草」は「陥穽を作つて生きる人間」（この場合は特に主人公）と言つてよい、という解釈をなされている。異様な存在感をもつて作中に息づく「僕」の「病的」さやM子の娼婦的魔性に注目しながら、小坂氏の解釈を発展的に捉えなおそうとする時、佐々木靖章氏の^{注3}へ「僕」のM子に向けられた苛虐の本能が、M子の本能にぶつかりはね返り、「僕」の本能を自虐的に変質させてしまうことになり、へ「石」（本能）に「ひしがれた

雑草」は、「僕」とM子の二人だともいえる」とされる見解、あるいは、文脈的意味を重視された大里恭三郎氏の「石」が「へ凍った憎悪」・「へ凍った性欲」・「へ凍った復讐心」など、Aの閉ざされた情念を表わす比喩」であり、「雑草」は「M子の本能をさしている」とされる解釈視点は、重要な手掛りとして見落せない。この小論では、『石にひしがれた雑草』の形象過程に見られる『クロイツェル・ソナタ』との対応要素を整理しながら、有島固有の氣質的特徴と認識志向に見合う表題の象徴的意味を考察してみたい。

一 形象モチーフと『クロイツェル・ソナタ』

本多秋五氏は^{注4}『石にひしがれた雑草』（大正七）は、『或る女』の手のこんだヴァリエーション」であるとされ、石坂従平宛の書簡で明されている『或る女』の思想が、『石にひしがれた雑草』には^{注5}「いっそう明瞭に現はれてゐる」ことを指摘されている。^{注6}「あなたは女性が男性の奴隷であるといふ事実をお認めになり

ませんか。(略)何物も男性から奪はれた女性に男性に対してその存在を認めらるゝために女性の唯一の宝なる貞操を売らねばなりません。生殖に必要である以上の淫欲の誘引を以て男性を自分に繋ぎねばなりません。然しこの不自然な妥協は如何して女性の本能の中に男性に対する憎悪を醸さないでゐられます。男女の争闘はこゝから生れ出ます。同時に女性はまだ女性本来の本能を捨てて事が出来ません。即ち男子に對する純真な愛着です。この二つの矛盾した本能が上になり下になり相剋してゐるのが今の女性の悲しい運命です。》(大正8・10・19、石坂養平宛書簡、傍線引用者)

有島がこの書簡で表白している女性観は、『クロイツェル・ソナタ』の主人公・ポズドマイシエフの女性観と殆ど異なるところがない。傍線部(一)の「女性が男性の奴隷である」という見解は、「女性を解放し、男と對等のあらゆる権利を与えてはいるものの、依然として女を快楽の道具として眺め」(14)る状況下では、「女は市場で売られる奴隷」(8)に等しいとするポズドマイシエフの考えに對應しており、傍線部(二)の女性が自己の存在性を主張するために、「女性の唯一の宝なる貞操を売」り、「生殖に必要である以上の淫欲の誘引」を働かせるという判断は、女性は「肉体を飾りたて」「男の性欲に働きかけ、性欲を通して男を」「支配」(9)しようとしているというポズドマイシエフの見方に重なり合っている。そして、傍線部(三)の女性の「男性に対する憎悪」

は、ポズドマイシエフの妻が結婚後の三、四日目頃から見せる「悲しみ」、「苛立ち」、「憎悪にもひとしい敵意」(12)に直結するものである。

このように、有島の書簡内容には、『クロイツェル・ソナタ』と鮮やかに照応する女性認識が認められるのであるが、有島固有の認識的特徴も見落せない。それは傍線部四の「男性に対する純真な愛着」と傍線部(四)の「二つの矛盾した本能」の「相剋」であるが、この特徴には、性的情動に對する有島固有の対応姿勢が関連しているであり、これは、ポズドマイシエフが「理想の一致とか、精神的同化とかにもとづく愛」(2)を否定するに至る過程と『リビングストーン伝』の四版序(大正8・3・20)の内容とを対応させてみる時、自ら明らかになってくる。

第一は独身時代の有島の特徴であるが、これは「肉体的関係をもった女に對する道義的關係から自己を解放する」「放蕩」(3)を「手柄とみなしてい」(同)るポズドマイシエフとは異なり、「童貞を守り通した」「極端な一種の潔癖性」(『リビングストーン伝』四版序、以下四版序と略記)を挙げることができる。もっとも、「常に」「肉体の要求に打ち負」(同)けて「実際に婦人を犯さな」(同)いが、「心の中では常に婦人を犯してゐた」(同)という迷いに注目する時、これは「何か甘美な存在としての」「ありとあらゆる」「女の裸」(4)に「苦しみ、神に折りながら、墮落しつつけていた」(同)少年時のポズドマイシエフの迷いと

それほど異なるものではないが、童貞を守り通した潔癖性は、やはり、ポズドヌイシエフには見られない有島固有の特徴と言えよう。この特徴はトルストイと同質のリアリズム手法を生かす冷徹な認識眼を持ち合わせながらも、時折、それに甘美な浪漫的感性を感傷的に割り込ませる誘因になっていると見てよからう。

第二は婚姻期における有島の特徴である。これは「性欲を浄化し」「純粋な霊的な考へをする」(四版序) 心情の中に見出すことができる。この心情は「愛が肉体的なものでなく、精神的なもの」(10) と理解し、婚約者を「天使」(同) として思い描くことのできるポズドヌイシエフの心情と照応している。

第三は結婚後の生活に見られる有島の特徴である。これは「子孫を設けるために、祭壇に捧げ物をするやうな心持」(四版序) をもって「夫婦の交り」(同) をせず、「天下暗れて肉の楽しみを漁」(同) りながら、「桃霊的といふやうな言葉の内容の空虚と虚偽」(同) を味わい、そして、「神聖な教会へは出席する事が出来」(同) ないままに、「人妻に思ひを寄せるやうな乱雑な心」(同) にまだなくていく荒廃状況を中心に整理することができ。この荒廃状況は「ハネムーンを美しく作りあげようと努めても」「終始」「公認」(12) された「淫蕩」(同) に耽り、やがては嫉妬や憎悪や不安の感情を増幅させていくポズドヌイシエフの地獄的生活に対応するものである。

この対応部に認められる有島固有の特徴は、ポズドヌイシエフ

が具体的な夫婦関係の中から、人間一般の本質的問題として、生活意識や感情を支配する性的情動や社会的背景を剔出し、地獄的生を克服する新たな生の方向を冷徹に認識化していくのに対し、旧来の倫理的観念の枠組みから逸脱する自己の性的情動があるがままの事実として受けとめながら、旧来の倫理的枠組みに拘束されない「自分を主にする生活」(四版序) への出発決意を固める意気込みを挙げることができる。

ところで、『石にひしがれた雑草』の基本的構想は、中村白葉より入手した「一人の男がいてある女と婚約していた。所がその男が洋行中、女は他の男と恋に陥った。最初の男が洋行から帰ると女は凡てを白状した。男は感歎にそれを許して結婚した。而して心に不断の嫉妬を秘めながらその女に親切の限りを尽した。女は肺病になった。而して死んだ。」(『石にひしがれた雑草』付記) という材料に負うものであるが、人間関係、状況設定、起伏心理、発生事件、認識帰結などの具象化作業が、有島自身の手に成るものであることは言うまでもない。「一人の男がいてある女と婚約していた」という素材が、『石にひしがれた雑草』の発端部における劇的要素として具象化されていく過程一つを取りあげてみても、有島独自の形象モチーフに支えられた性格設定を見出すことができるのである。「不思議に男の羨望と嫉妬とを挑発する事に妙を得」ているM子の魅惑的な媚婦性とか、そのM子の「欠点なり、悪意なり、不貞操なりがそのまゝに」「誘惑」となる「僕」

の「病的」さなどは、「自分を主にする生活」(四版序)への出発決意を固める有島が、自分自身の様々な弱点を見定めるために必要な性格設定であつたと見てよからう。ここで、『石にひしがれた雑草』の主要な形象要素に見られる『クロイツェル・ソナタ』との照応関係に注目してみたい。

二 形象要素と『クロイツェル・ソナタ』

第一はM子に疑惑を抱く原因となつた紙片の筆跡を確認するための方策を立てる「僕」が、嫉妬に狂う本心を隠し、加藤との交際の復活をM子に申し出る時の理念的道理を踏まえた対人姿勢と嫉妬や不安に苦しみながらも、トルハチエフスキーの訪問を鷹揚に受け入れるポズドマイシェフの応待姿勢との照応関係である。

《M子、僕はあなたを疑はども疑ふのがもういやだ。(略)僕はもう誰とも隙壁を設けてはゐられなくなつた。そねんだり疑つたりするのは苦しい事だ。人間が全く下等になつてしまふ。あなたも心がきまつてさへゐたら加藤君と交際したつて、いゝだらう。交際するのを恐ろしがるやうでは却つて僕に不安を残す(略)》(傍点引用者)

ポズドマイシェフは「エレガントで、魅力的で、男心を騒がせるほど美し」(21)い妻と「エレガントな外貌と新鮮さ、そして何よりも、疑う余地のない豊かな音楽の才能」(同)を持つトルハチエフスキーが、合奏を通して接近することに嫉妬心を抱きな

がらも、トルハチエフスキーに対し、「いんぎんばかりか、愛想のいい態度をと」(同)り、次の日曜日の会食と妻との合奏を約束させるのであるが、彼の「本意に反し」(同)て、このような事態に至らしめる「何かの力」(同)を復讐心と策略に置き換える時、加藤との交際の復活をM子に申し出る「僕」の、理念的道理で纏める美辞麗句が生まれてくるのである。ポズドマイシェフの欺瞞的生活姿勢が、分別を超えた淡白な反射的行為であるのに対し、「僕」の欺瞞的生活姿勢が深慮に支えられた粘質な策略的行為になつている特徴は見逃がせない。

第二は紙片の筆跡が加藤のものであることを確認した「僕」が、復讐を果たすために、M子を加藤や美少年に接近させる状況設定及び「僕」の無限のない嫉妬妄想と、ポズドマイシェフの妻とトルハチエフスキーの密会状況の設定及びポズドマイシェフの無限のない嫉妬妄想との照応関係である。

《三人の間の交際が度重なると、僕は屢々君等二人を残したままで座を外したものだ。僕は他の部屋にたつた独りゐて、君等の間に取り交はされる眼と眼との会話や、物の受け渡しをする時触れ合ふ指と指との私語を眼で見ると明かに想像してゐた。さうして思ふ存分僕の嫉妬に油を注ぐ事を楽しんだ。》

(傍点引用者)

ポズドマイシェフはトルハチエフスキーと妻との接近する状況を、「本意に反し」(21)て用意はしても、二人だけを残して座

を外すことはないのであるが、トルハチエフスキーが自分の留守中に訪れている状況に遭遇し、ピアノの音が「二人の談言や、ひよっとしたらキスの音をかきつけたために、わざと囁かされているらしい」(同)という偵測を広げるポズドヌィシェフの嫉妬妄想は、「僕」の嫉妬妄想と全く同質のものである。

性的欲望の充足衝動で妻を支配しつづけ、結局は、「性欲に働きかけ、性欲を通して男を」「支配し」(9)ようにする妻の報復を受けなければならないポズドヌィシェフは、自尊心の毀損する怖れを憎悪の感情と攻撃的言動に変容させ、それを妻に正面から直情的にぶつけていくのであるが、これに対して「僕」は、自尊心の毀損する怖れを温かな愛の対話や優しい抱擁力に擬装化し、報復行為を背面から策略的に重ねていくのである。自分の「嫉妬に油を注ぐ事を楽し」む自虐的な異常性まで覗かせる「僕」は、ポズドヌィシェフが外に向かって直情的に発散させるような反射的情動を内部に鬱屈させ、内向的に処理しようとしているという外はない。このような「僕」の性格設定には、諸種の問題を内省的に突き詰めながら分裂し、直情的に決断を下し得ない有島自身の因循姑息な気質の特徴が投影しているものと考えられる。

第三はM子に淫蕩な娼婦性を復活させようとする「僕」の方案に働いている人間認識と、性的欲望を通して男性に報復しようとする女性の魔性的背景を分析するポズドヌィシェフの人間認識との照応関係である。

《贅沢な生活、精神的な養分の枯渇》(一)有らゆる淫靡な臆立て、
虚偽の常習、そんなものがよつてたかつてその頃のM子を立派な娼婦に仕立てあげてくれた。》(傍線引用者)

傍線部(二)の「淫靡な臆立て」は「M子を厳しく自分に縛りつけ」ようとする「僕」の「欲念」やM子自身の胸中に働く贖罪意識から解放し、加藤や美少年との自由な交際のもとで、生来の娼婦性を蘇生させる「臆立て」である。これによって、「日曜旦」の「教会」参りや「寝る前」に「聖書」を読むことを日課としていたM子の生活姿勢は、「家庭の和楽」を願う気配りとともに崩壊し、M子は傍線部(一)の「精神的な養分の枯渇」と傍線部(三)の「虚偽の常習」者に堕ちていかなければならなかったのである。このM子の変貌過程で注意すべきことは、「僕」の狭量な嫉妬と粘質狡猾な詐術のもとでは「娼婦」的魔性を露呈しながらも、「僕」の寛容な度量と純一温和な愛のもとでは、「家婦」的堅実さを十分に発揮していたことである。

男性の「高尚な」「詩的な愛」(6)が「精神的な価値」(同)よりも「肉体的な親密さ」(同)によって左右されることを知りながら、「男の清純さを信じているようなふり」(同)をし、しかも、「実際にはまるきり違うふうに振舞う」(同)女性の蠱惑的魔性を捉える「クロイツェル・ソナタ」のトルストイは、この魔性を「男性と対等の権利を奪われてきたため」(9)にとらざるを得ない自己防衛的手段として整理しているが、「僕」の対応

姿勢によって変化するM子の情念反射の様相を捉える『石にひしがれた雑草』の有島にも、トルストイと同様に、女性の生活姿勢を決定づける外的要因への認識志向が働いていたと見ることができ。問題は、このように女性の生活姿勢を決定づける外的要因に着目しながらも、『石にひしがれた雑草』の有島はM子の幽微的魔性を生来的な資質として設定しており、性の快楽を強要する男性の生活感性とかその男性が優位を占める不平等な社会体制との因果関係を問い詰めるトルストイのように、人間生活の様々な悪と不幸を生み出す元凶としての性的欲望を告発する道を開いてはいない。

『クロイツェル・ソナタ』のトルストイが、人間生活の様々な悪と不幸を生み出す元凶としての性的欲望を認識化しているのに対し、『石にひしがれた雑草』の有島は、「不思議に男の義理と嫉妬とを挑発する事に妙を得てゐる」M子の生来的媚婦性と「M子の有する欠点なり、悪意なり、不貞操なりがそのまゝに」「誘惑」となる「僕」の「病的」さがとの交錯関係を凝視しながら、「僕」の内面に起伏する病態的情動があるがままの生命の実態として認識化し、そして、その生命の実態に身を任せる人間の悲劇的運命を見定めようとしていると言つてよからう。

第四は人の心を無意識のうちにあるものと通じ合わせる花の香りと音楽との照応関係である。

「僕」はある日M子を蘭の鉢の並ぶ温室の中に誘うのである。

それはM子の心を占拠している加藤の魅力的重さを、M子の反射的情動の中に探り当てようとする企てによるものである。M子が全体の花の香りの融け合う中から「上等な葉巻きのやうな匂ひ」のする花の鉢を捜しはじめる時、「僕」の企図は成功するのである。「幾鉢も匂ひを嗅い」で、「どれも」「思ふやうな匂ひはない」と言い出す時のM子は、加藤固有の魅力的存在感を感覚的に察知しながらも、情念を滴たす重い魅力的実体を探り当てることができず苛立っていると見ることができ。M子の選んだ「上等な葉巻き」に近い香りを放つ鉢を持ち、M子の後を歩く「僕」が、「ひとりでに鼻をかすめるその匂ひをか」きながら、「思はず」加藤の姿を思い浮かべる無意識の反射情動は、M子の心中に認められる反射情動と同一のものである。

『クロイツェル・ソナタ』のトルストイは、「自分の真の状態を忘れさせ」「実際には感じていないことを感じ」(23)させたり、「理解できないことを理解」(同)させたりする音楽の劣悪危険な力と、「それまで知らなかった、まったく新しい情感や、新しい可能性」(同)を開き、「まさにこうでなければいけないんだ」(同)という「新しい状態の自覚」(同)を齎す音楽の崇高神秘な力をボズドマイシェフに感知させながら、嫉妬心の痛苦に陥れたり、爽快な満足感に浸らせたりしているが、『石にひしがれた雑草』の有島は、音楽と同一の不思議な感化力を持つ花の香りの力に「僕」を反応させながら、嫉妬心の痛苦と復讐衝動の

中に立たせている。しかし「僕」は、この場面においても、ポズドヌイシェフのように、強固な自我を剣き出しながら憎悪と憤懣をぶつけ合う直情的な争いを惹き起こすことはない。反射的に起こる憎悪と憤懣を心底に鬱屈させ、自我の検証を嫉妬心の痛苦と復讐衝動の中に屈折させる。「僕」の生は、自ら、陰惨なものになつてゐる。ここには、すでに見てきた有島の氣質的特徴に加え、^{（五）}告発すべき他者の罪科をも己れ自身の責任として受けとめ、重い罪意識に苦しむ有島自身の誠実な人間の良心の屈折的投影を見出すことができる。

第五は淫乱な情動的生活の果てに陥る、嫉妬と憎悪と不安の苦しみに満ちた生活や、情欲的生活の途絶が惹き起こすヒステリックな混乱状態の照応である。

「僕」が「手綱をゆるめた時」に、「女の浅慮と悪戯好きな欲念」から「幾人もの美少年」を「弄ぶ」M子の放逸な生活は、「肉体關係をもった女に対する道義的關係から自己を解放」（3）して「放蕩」（同）に耽りながらも、その生活を「こうでなければいけないんだ」「俺は愛すべき男だ」（同）と信じていた結婚前のポズドヌイシェフの生活と同質のものである。また、「自分たちの醜い心」が「造り出す恐ろしい幻覚」に襲われながら、「取りとめのない恨みを結ぶ」M子の嫉妬と憎悪と不安の苦しみに満ちた生活は、放蕩な独身生活の後、「公認」（12）された「淫蕩」（同）なハネムーンや、「性欲」の昂進と充足に伴う恋情と憎悪

を情性的に繰り返す日常生活を重ねながら、妻の報復に会い、嫉妬と憎悪と不安の苦難地獄に陥っていくポズドヌイシェフの生活と照応するものである。そして、「毎朝」「侵す頭痛」と「何んでもない事に涙ぐまれる取りとめのない悲哀」と「突然の激怒」などで混乱するM子のヒステリック症状は、嫉妬と憎悪と不安の苛立ちから発するポズドヌイシェフの激怒を浴びて、「泣いたり、笑ったりして、何一つ言うことができず、全身を痙攣させる」（22）彼の妻のヒステリック症状に直結するものである。

以上の比較から明らかなように、「石」にひしがれた「雑草」の有島は、『クロイツェル・ソナタ』のトルストイのように、人間生活の様々な悪と不幸を生み出す元凶としての性的欲望を認識化しようとしているのではなく、直情的に決断を下し得ない因循姑息な氣質、一事に拘泥しつづける粘質な固執的性格、振幅の大きい感情的起伏、娼婦的魔性に引き寄せられていく反射的情動、そして、過剰な自己呵責の意識など、有島自身の内部に抱え持つ問題的傾向を屈折的に拡大化し、その悲劇性を見定めようとしていたと言えよう。

三 「石」と「雑草」の象徴的意味

（一）「気が付いて立ち上ると四辺は夕方の光になつてゐた。僕は今朝の約束を思ひ出して帰る支度をした。見ると今まで腰かけてゐた切石の下からも雑草は這ひ出てゐた。根は正しく石の下に

あるのに、源愼き苦しんで伸び出た葉が、いちけながらも重い石の繩を払いのけて、光と雨との分け前にありつかうとしてゐる。僕は外の草の事などは忘れてしまつて、その草一つを石から自由にしてやらうと思つた。而して力まかせに切石を動かして見た。石は冷やかに、動かうとはしなかつた。『可哀さうに、秋が来ると、お前は逸早く萎んでしまふのだ』さう思ひながら僕はその雑草を見捨て、立ち上つた。』(傍線引用者)

傍線部(一)の「氣が付いて立ち上る」前の「僕」の胸中を占めていた想念が、「夕方の光になつて」いく「四辺」の状況を忘失させるほどの重みを持っていることは言うまでもない。この想念をどのように解釈するかによつて、傍線部(二)の「切石」及び傍線部(三)の「雑草」の象徴的意味は決まってくるのである。

まず第一に注意しなければならないのは、加藤と連れ立つM子の不貞を目撃した「僕」の衝撃である。『クロイツェル・ソナタ』にも同様の状況設定が見られる。ポズドマイシェフは、「僕」と同様に、旅行先で「全体の調子が不自然なものに思え」(24)る妻からの手紙に接し、急遽帰宅するのである。「一時近」(26)い深夜、トルハチエフスキーと二人きりで客間にいる妻を眼にしたポズドマイシェフは、嫉妬心の掻き立てる激情を抑えることができず、短剣をもつて二人を襲うことになるのであるが、ポズドマイシェフのこの激烈な憤怒の炸烈は起るべくして起つた反射的自然情動と言わなければならない。『石にひしがれた雑草』

の有島が『クロイツェル・ソナタ』の末尾に置かれているこの状況設定を劇的展開部に位置づけ、しかも、反射的自然情動としての激烈な憤怒の炸烈を「僕」に抑止させたのは、「僕」の特異な内的衝動とその運命を見定めなければならなかったためと考えられる。憤怒の炸烈を胸中で抑える「僕」が、宿での昼食、洗顔、着替えを自失のうちに終え、いつのまにか「傘もささずに田端の高台」を「歩いてゐる」のは当然の成り行きである。

第二はこの自失状態にある「僕」の胸中で起伏する無意識の想念に注意しなければならない。有島はこの想念を描く前に、まず「ぞくぞくと氣持よさうに葉先を天に向けて、生き伸びてゐる」「道傍」の「雨氣を帯びた雑草」に「僕」を注目させているが、「何といふ恵み深い自然の姿だ」という「僕」の感動には重い意味がある。この感動をもつて奇々とした雑草を「一つ一つ綿密に」眺める「僕」の胸中には、自然的な生命衝動に従つて伸び伸びと生きる健康的な人間の姿が思い浮かんでいたと見てよからう。この感動の直後、M子の「奸計」と自分自身の策略に思いをめぐらす「僕」にとつて、その「雑草」がM子や自分自身の生の姿に重なり合うことはない。

やがて、「切石の上」に腰を下ろした「僕」は、「どんよりと動きもせぬ雨雲」のような暗く重い心で、「情熱を飽くまで満足さしてくれ」る「蠱惑的」なM子への愛を確認しながら、「M子の有する欠点なり、悪意なり、不貞操なりがそのまゝに」「誘惑」

となる自分の「病的」なさが、を自覚化するのであるが、この時、「病的」がどうしたといふのだ」「そんな病的な感情ですら持つ機会の与へられない健全な人間が憐れまれるばかりだ」(傍点引用者)という開き直りの姿勢から、M子の娼婦的魔性の賣す掛け替えない充足感を噛みしめる「僕」は、M子の娼婦的魔性と自己の「病的」さの特異性を深く意識していたと見てよからう。

第三はM子の娼婦的魔性と自己の「病的」さを深く意識していた「僕」にとって、「切石の下」から這い出る「雑草」がどのような意味を持っていたかということである。傍線部四において、「僕」が「外の草の事などは忘れてしま」い、「石の下」から「蕨掻き苦しんで伸び出た」「草一つを石から自由にやらうと思」うのは、その草に「病的」なさが、を持つ自分と娼婦的魔性を持つM子の生の姿が重なり合うからに外ならない。傍線部四の「石」が「冷やかに、動かうとはしな」い状態は、癒しようもない「僕」の「病的」なさが、やM子の娼婦的魔性を象徴するものであり、傍線部六において、「石の下」から「蕨掻き苦しんで伸び出た」草に対し、「可哀さうに」と秋の凋落に同情を寄せる「僕」の思い入れは、M子との愛が悲劇的に終わる運命を予感した感懐と見ることが出来る。

つまり、「石」は「僕」の「病的」さが、やM子の娼婦的魔性の象徴であり、空に向かって伸びゆく背々とした「雑草」は、自然な生命衝動に従って伸び伸びと生きている健康な本能的生の象

徴であり、そして、「石にひしがれた雑草」は「病的」さが、や娼婦的魔性によって健康な本能的生を書している「僕」やM子の生の象徴に外ならない。

むすび

有島が「クロイツェル・ソナタ」のトルストイについて言及したのは、明治四十一年五月二十八日の日記の中である。この日記文からは、有島が「クロイツェル・ソナタ」をいつ読んだのか、明らかにすることはできないが、「クロイツェル・ソナタ」への攻撃に対するトルストイの反論姿勢とか「決然たる事」のできない有島の「微温」的生活姿勢の特徴、あるいは、有島の自己呵責の深さなどを窺うことができる。

前年の明治四十年四月、有島はアメリカ留学の生活とヨーロッパ遊歴の旅を終えて帰国したが、帰国後、見知らぬ女性との結婚を父に勧められた有島は、「見も知らぬ女と結婚するよりは、気心の知れた河野信子と結婚したい」と父に願い出ながらも、父の強硬な反対を受けて、決然たる事も出来ないままに諦めている。そして、信子の結婚式の報を受けて、憂鬱と不眠に悩まされた有島は、明治四十一年四月十八日の日記の中で、自己欺瞞の生を内省的に整理している。このように微温的生活姿勢をとりつづけている自分自身の自己欺瞞的生を徹しく自省する有島にとって、「クロイツェル・ソナタ」への酷評に対するトルストイの決然たる反

論空勢は、畏敬すべきものとして有島の心底深くに残ったものと考えられる。

《僕は聖者になるには余りに人間の欲情を持ち過ぎるし、凡人になるには余りに潔癖過ぎる。僕の生命は原始的な純一さを持たずに、文明の病毒を受けて何時でも二元に分解されてゐる。これが憤られ、悲しまれる。然し僕は恐れまい。僕は自己の分解を徹底させる。》(迷路、傍点引用者)

空に向かって伸びゆく青々とした「雑草」は「原始的な純一さ」を持った「生命」の象徴であり、「石」は異常な作為や固執に人を陥れる「文明の病毒」を受けた病的生生活情動の象徴であると言ひ換えることもできよう。異常な作為と固執性を発揮するM子の娼婦的魔性と「僕」の「病的」さがとの相乗作用によって増幅する二人の病的生生活情動は、自他の「純一」な「原始的」生命を枯渇させるものであり、『石にひしがれた雑草』の有島は、「僕」とM子の内的病態の「分解を徹底」させ、純一な本能的生の回復を図る道を探り当てようとしていたと言えるのではなからうか。

〈注〉

- (1) 『白樺派の文学』(昭和30・11、講談社)
- (2) 『石にひしがれた雑草』と「或る女」——主人公の精神構造と主題——(『日本近代文学』4、昭和41・5)
- (3) 『カインの末裔』試論(『文芸研究』57、昭和42・11)

(4) 『石にひしがれた雑草』論(安川定男・上杉省和編

『作品論 有島武郎』(昭和56・6、双文社出版)

(5) Ⅱ(1) (6) Ⅱ(1)

(7) 拙稿『「かんかん虫」(有島武郎)考』(「岡山県立短期大学研究紀要」26、昭和57・7)で具体的に触れる。

〈付記〉

『石にひしがれた雑草』『リビングストーン伝』四版序などの引用文は、新潮社版有島武郎全集(全10巻)を用い、『クロイツェル・ソナタ』の引用文は、原卓也訳『クロイツェル・ソナタ 悪魔』(新潮文庫)による。

(岡山大学教養部教授)

研究室受贈図書雑誌目録(五)

- 語文論叢(千葉大学文学部国語国文学会) 第十六号
- 駒沢国文(駒沢大学) 第二十六号
- 佐賀大國文(佐賀大学) 第十六号
- 相模国文(相模女子大学) 第十六号
- 滋賀大國文(滋賀大学) 第二十七号
- 静岡大國文(静岡大学人文学部国文談話会) 第三十四号
- 実践国文学(実践女子大学) 第三十五号、第三十六号
- 就實語文(就実女子大学) 第九号、第十号